The Strategy of the Expedition to the North by *Zhege Liang* and the Non-Han Race in the Longxi and Hexi Corridor—the Qiang and "monarchs of various nations in *Liang Zhou*" during the Later Han and the Three Kingdoms period

Takashi Mitsuda

In the *"Longzhongdui"*「隆中対」, the first strategy of the expedition to the north 北伐 by *Zhege Liang* 諸葛亮 was described as follows. First, *Liu Bei* 劉備 conquered *Jing Zhou* 荊州 and *Yi Zhou* 益州. Then he adjusted the ruling system in his own territory, conciliated western and southern barbarians and made amicable relations with *Sun Quan* 孫権. After that, when confusion occurred in the land, *Liu Bei* asked his most reliable subordinate to serve as commanding generals leading an attack from *Jing Zhou* as well as making a sortie from *Yi Zhou* by himself. But eventually losing *Jing Zhou* and *Guan Yu* 関羽 to the invasion by *Cao Cao* 曹操 and *Sun Quan*, failing to recapture *Jing Zhou* and *Liu Bei's* death, *Zhege Liang*, who was responsible for *Liu Bei* on his deathbed and took care of his affairs after he was gone, was executed while reproducing *"Longzhongdui"*. After *Meng Da* 孟達 was subdued by *Sima Yi* 司馬懿, he made a sortie into *Longxi Jun* 隴西郡 to shut off the road leading to the *Silk Road*, and over time sought *Chang'an* 長安 written in the *"Sanguozhi"*『三國志』*Chen Tai Chuan* 陳泰傳. The underpinning of this strategy were the unstable social and political conditions of *Longxi Jun* and *Hexi Corridor* 河西回廊 that were populated by many barbarians, the strategy of the expedition to the north by *Zhege Liang* was planned while keeping in mind a full account of the revolt by the *Qiang* 羌 which started in 107 AD. It is thought that *Zhege Liang* schemed to cooperate with the *Sogdian* and the *Yueshi* 月支（月氏）sent by "monarchs of various nations in *Liang Zhou*"「涼州諸國王」, and that he wanted to bring the *Silk Road* and *"the Silk Road in the airy region"* related to *"Minzuzelang on the west of Sichuan"* 川西民族走廊, *"the South-western Silk Road"* related to the *Marine Road* under his control for the purpose of trying to link these roads along with the territorial expansion of the *Shu Han* 蜀漢 so as to lower the tax burden in the country.

蜀漢・諸葛亮の北伐戦略と
隴西・河西回廊の非漢族について
―後漢・三国期の羌・「涼州諸國王」

満　田　　剛

はじめに
１．陳壽『三國志』本文に見る諸葛亮の北伐戦略
２．諸葛亮の北伐戦略と隴西・河西回廊の非漢族
おわり

はじめに

中国・三国時代を生み出すきっかけの一つになった諸葛亮と蜀漢の基本戦略がいわゆる「隆中対」（「草蘆対」）である[1)]。実際に途中までは「隆中対」の通りに進んでいくが、政治情勢の変化によって、諸葛亮の戦略も「隆中対」から修正せざるを得なかった部分が存在する。

本論文では諸葛亮の北伐戦略について「隆中対」から諸葛亮の最初の北伐に至るまでの変化を陳壽『三國志』及び同裴松之注〔以下、「裴注」と略す〕から分析した上で、その戦略と河西回廊や隴西の非漢族、特に羌や「涼州諸國王」のもとでの月支（月氏）・康居の動向の関係について整理し、考察を深めていきたい。

１．陳壽『三國志』本文に見る諸葛亮の北伐戦略

「隆中対」については、『三國志』巻三十五〔以下、『三國志』からの引用については書名・巻數を省略する〕諸葛亮傳に

亮答曰：「自董卓已來，豪傑並起，跨州連郡者不可勝數。曹操比於袁紹，則名微而衆寡，然操遂能克紹，以弱爲強者，非惟天時，抑亦人謀也。今操已擁百萬之衆，挾天子而令諸侯，此誠不可與爭鋒。孫權據有江東，已歴三世，國險而民附，賢能爲之用，此可以爲援而不可圖也。荊州北據漢、沔，利盡南海，東連吳會，西通巴、蜀，此用武之國，而其主不能守，此殆天所以資將軍，將軍豈有意乎？益州險塞，沃野千里，天府之土，高祖因之以成帝業。劉璋闇弱，張魯在北，民殷國富而不知存恤，智能之士思得明君。將軍既帝室之胄，信義著於四海，總攬英雄，思賢如渴，若跨有荊、益，保其巖阻，西和諸戎，南撫夷越，外結好孫權，内脩政理；天下有變，則命一上將將荊州之軍以向宛、洛，將軍身率益州之衆出於秦川，百姓孰敢不簞食壺漿以迎將軍者乎？誠如是，則霸業可成，漢室可興矣。」

とあるが、ここでは具体的に

①曹操・孫権がまだ支配していない荊州・益州をおさえて内政を整える

②西方および南方の非漢族を手なずける

③呉の孫権と友好関係を結ぶ

④天下に「変」があれば、上將により荊州から、そして劉備自身により益州から同時に北伐を行う

との戦略が示されており、この計はあくまで天下統一のための戦略であり、天下を三分することが最終目標ではないことや、この後の劉備陣営は実際にこの戦略どおりの行動をとっていくことをおさえておきたい。

諸葛亮が劉備陣営に加わった後の動向を「隆中対」における戦略と比較すると、荊州・益州をおさえて内政を整えるところまでは予定通りであったが、関羽の死と荊州失陥[2)]、そして劉備による荊州奪還の失敗と劉備自身の死[3)]で齟齬が生じた。

それに対して、諸葛亮が修正を加えてゆくことになるが、南中への遠征[4)]、孫權との友好関係の樹立[5)]など、「隆中対」での戦略をそのまま引き継いだ政策も実行された。

さらに、諸葛亮は魏の皇帝・曹丕の死という「変」を受けて、一度は蜀漢を

裏切り、魏の新城太守となっていた孟達を調略し、孟達が荊州から、諸葛亮が益州から同時に北伐を実行しようとしていた[6)]。これは諸葛亮が「隆中対」での戦略に拘っていたことを示すものであろうが、司馬懿が孟達を急襲して滅ぼしたことで実現しなかった[7)]。

これにより、最終的に荊州からの北伐の可能性がほぼなくなったため、「隆中対」と異なり、蜀漢の北伐経路は益州からのみのものとならざるを得なくなったのである。

そんな状況を受けて変更された後の諸葛亮の北伐戦略に関する陳壽『三國志』及び裴注の記述について見ると、魏延傳裴注所引『魏略』に

> 夏侯楙爲安西將軍，鎭長安，亮於南鄭與羣下計議，延曰：「聞夏侯楙少，主婿也，怯而無謀。今假延精兵五千，負糧五千，直從褒中出，循秦嶺而東，當子午而北，不過十日可到長安。楙聞延奄至，必乘船逃走。長安中惟有御史、京兆太守耳，横門邸閣與散民之穀足周食也。比東方相合聚，尚二十許日，而公從斜谷來，必足以達。如此，則一擧而咸陽以西可定矣。」亮以爲此縣危，不如安從坦道，可以平取隴右，十全必克而無虞，故不用延計。

とあるように、「平坦で軍が通りやすい道を経由し、隴右を奪取する」ということが指摘されるのみで、陳壽『三國志』本文には記述がなく、「隆中対」と実際の北伐に関する具体的記述から考察されてきた。

しかし、諸葛亮の北伐戦略について陳壽『三國志』本文に記述が全くないわけではない。諸葛亮及び彼の北伐とは直接関係のない一文ではあるが、陳羣傳附陳泰傳本文の以下の記述を確認しておきたい。

> 初，泰聞經見圍，以州軍將士素皆一心，加得保城，非維所能卒傾。表上進軍晨夜速到還。衆議以經奔北，城不足自固，維若斷涼州之道，兼四郡民夷，據關、隴之險，敢能沒經軍而屠隴右。宜須大兵四集，乃致攻討。大將軍司馬文王曰：「昔諸葛亮常有此志，卒亦不能。事大謀遠，非維所任也。且城非倉卒所拔，而糧少爲急，征西速救，得上策矣。」泰每以一方有事，輒以虛聲擾動天下，故希簡白上事，驛書不過六百里。司馬文王語荀顗曰：「玄伯沈勇能斷，荷方伯之重，救將陷之城，而不求益兵，又希簡上事，必能辦賊故也。

都督大將，不當爾邪！」

これは魏の正元２年、蜀漢の延熙18年（西暦255年）[8]に、雍州刺史の王経が姜維に大敗して狄道城にたてこもった際、この事態への対応についての魏内部での協議の内容である。

「衆議」に対する司馬昭の発言からすれば、「衆議」の内容が諸葛亮の北伐戦略であると（少なくとも）陳壽『三國志』本文の中の司馬昭が考えていたということになる。そして、その戦略によって隴西などを攻略されることは、（直接的には書いていないが）魏の嫌うところであることは理解できるだろう。

つまり、諸葛亮の北伐戦略は、

①一旦西北方面に出撃し、シルク・ロードへとつながる涼州（河西回廊）への交通路を遮断する

②四郡（隴西・南安・天水・略陽）の人民・蛮族をあわせ、関・隴の要害を占拠する

③隴西（そして涼州）を攻略し、長安を窺う

ということであった（と少なくとも司馬昭は考えていた）のである。

加えて、郭淮傳には所謂五丈原の戦いの直前の記述として

是時司馬宣王屯渭南；淮策亮必爭北原，宜先據之，議者多謂不然。淮曰：「若亮跨渭登原，連兵北山，隔絶隴道，搖蕩民、夷，此非國之利也。」宣王善之，淮遂屯北原。塹壘未成，蜀兵大至，淮逆擊之。

とある。つまり、諸葛亮の五丈原の戦いでの基本戦略は、渭水の北側の長安から隴西への道（すなわち河西回廊への道）を遮断し、その地方の人民・蛮族をあわせることであり、郭淮はこの戦略が実行されることを恐れていたのである。そして、この郭淮の指摘した戦略は、先に引用した陳羣傳附陳泰傳の一文の戦略とほぼ同じであることに注意が必要であり、郭淮の指摘を考慮すると、司馬昭だけでなく司馬懿も同様に考えていた可能性がある。

ところで、諸葛亮が実際に行った北伐の戦略に関する上記のような記述は陳壽『三國志』本文の他の部分や裴注、現行『晉書』及び『十八家晉書』には存在しない。ということは、陳壽のみがこの記述を『三國志』本文に差し込んで

いることになる。ここまで述べたことを踏まえると、陳壽本人もこの戦略こそ諸葛亮が実行した北伐戦略であると認識した上で記載していたものと思われる[9)]。

結果的に、ここまで述べたような諸葛亮の北伐戦略の通りに進んだのが、魏の太和２年、蜀漢の建興６年（西暦228年）の最初の北伐であった[10)]。この戦いの際、諸葛亮は「郿を奪う」と宣伝し、褒斜道から趙雲・鄧芝を囮として出陣させると、魏の大将軍・曹真は（諸葛亮の作戦にまどわされ）総勢をあげて郿を防御した。その間に諸葛亮は祁山から天水・南安・安定の三郡に向かい、制圧した。

そんな中、魏の隴西太守の游楚だけは官民をまとめて城を守った。南安の人々は蜀漢の兵をつれて隴西を攻撃したのだが、その際の游楚の以下のような発言が張既傳裴注所引『魏略』にある。

> 楚聞賊到、……而自於城上曉謂蜀帥，言：「卿能斷隴，使東兵不上，一月之中，則隴西吏人不攻自服；卿若不能，虛自疲弊耳。」

これによると、游楚は城壁の上から蜀漢の司令官を説得したのだが、彼は「隴山を断ちきって東方の兵が来るのを妨げられるならば、一カ月のうちに隴西の官民は攻撃されなくても自分から降伏する」と非常に興味深いことを述べている。この説得の後、游楚は馬顒に命じて陣太鼓を鳴らして攻撃させると蜀漢軍はひきあげた。

当然、魏は東方の長安・洛陽方面から援軍を送ってきたわけだが、上記の記述によれば、第一回目の北伐の成否は、その援軍の通る道を遮断することにかかっていた。しかも、一カ月耐え忍べばよかったので、必ずしも勝つ必要はなかった。そのための重要地点が、具体的には、隴山付近の街亭であった。魏では曹叡自身が長安へ行幸し、張郃を隴西に派遣した。諸葛亮は馬謖・王平を街亭に派遣し、高詳（高翔？）を列柳城に駐屯させた。

ところで、史念海によると、三国時代の地層にある花粉を調べた結果、三国時代の街亭付近（隴山山脈）は、うっそうと樹木が茂った森林地帯であったとさ

れている[11)]。したがって、人間が切り開いた街道以外は大軍が通行できなかったと考えられる。諸葛亮は森林地帯の中で、街道以外には迂回できない状態で張郃の援軍を防ごうとしたのである。

ここまでの流れを見れば、陳羣傳附陳泰傳にある姜維の、そして諸葛亮の「戦略」とほぼ同じであることが分かるだろう。あとは、街亭で魏の援軍をしのぎ、隴西から河西回廊を完全に抑えて、長安を窺うことが重要であったと見られる[12)]。

ここで馬謖は諸葛亮の指示に背き、王平の諫めもきかず山の上に陣を敷いて水路と街道を捨ててしまい、張郃に水の手を断たれ[13)]、馬謖は大敗して軍兵は四散したとされる。ただ、王平の指揮する千人だけは陣太鼓を打ち鳴らして踏み堪えたので、張郃は伏兵の存在をあやしんで追撃しなかった。王平は徐々に残留兵を収容し、将兵を率いて帰還した[14)]。また、列柳城にいた高詳も郭淮に敗れ、諸葛亮は西県の千余家を移住させ、総退却した。張郃が街亭で馬謖を破った後、安定の住民楊条らが官民をつれ去って月支城[15)] に立てこもった。曹真が軍を進めてこれを包囲すると楊条は自らを後手に縛り上げて降伏し、こうして曹真や張郃らによって三郡は平定された。さらに郭淮は隴西の羌族の名族である唐蹏を枹罕でうち破っているが、これらの記載から、諸葛亮が隴西の月氏（小月氏）や羌を味方にしていたと見ることができ、これは「隆中対」や陳羣傳附陳泰傳の戦略の通りの行動であると見られる。

２．諸葛亮の北伐戦略と隴西・河西回廊の非漢族

このような諸葛亮の戦略方針の意図をつかむためには、少なくとも後漢期から諸葛亮の北伐に至るまでの隴西や河西回廊の非漢族の歴史[16)] についておさえておく必要があるだろう。

河西回廊の地域は戦国時代末から秦漢のはじめにかけて、匈奴が支配していた異民族の地であった。その頃から住民構成は複雑で、河西地域には敦煌と酒泉・張掖の間にいた月氏や羌、氐などが存在していた。隴西にも羌・氐[17)] など

の非漢族が広く居住していたと考えられている。

河西地域は、前漢末から後漢初にかけて独自に五銖銭を鋳造できる経済力を持っていた[18]が、これは「前漢末から後漢末にかけて河西・隴右が政治的・社会的・経済的に独立の一域として中原に対抗する形勢にあったことを明示している」[19]と考えられる。

その後、河西地域では匈奴と前漢・後漢の激しい戦いがあっただけでなく、後漢の初めにこの地域で隗囂や竇融が割拠するといった動きもあり、また王莽の末年から羌が多く移住させられ、後漢統一後も、一時的に平穏な時期もあったが、たびたび羌との戦いが続いていた。特に永初元年（107年）からの羌との戦いは激しく[20]、永初四年（110年）には涼州放棄論も唱えられるほどであった[21]。

ちなみに、この時の羌との戦いでは、永初元年に先零種の羌が叛いて、隴に至る道を遮断したとあり[22]、さらに翌永初二年（108年）11月には滇零等の羌が「天子」を北地で自称し，武都・参狼・上郡・西河の諸雑種を招集して東は趙、魏を侵略し、南は益州に入って漢中太守の董炳を殺害し、三輔にも侵攻して隴に至る道を遮断したとされる[23]。

このような羌の動向は先に述べた諸葛亮の戦略の中の「涼州への通路を遮断し、四郡（隴西・南安・天水・略陽）の人民・蛮族をあわせ、関・隴の要害を占拠」するという部分と類似している。

また、後述する秦嶺山脈を通る交通路の地域においても、先に述べたように永初二年に漢中太守の董炳が殺害され、永初四年にも褒斜道の褒中が攻撃を受け、漢中太守の鄭勤が戦没しており[24]、さらに同年には羌への対策のために雍に扶風都尉が置かれている[25]が、この雍は五丈原のすぐ近くでもある。

このことを踏まえて諸葛亮の北伐と比較してみると、諸葛亮の北伐戦略での出撃先は、全て永初年間の羌の叛乱の影響が及んでいた地域であることがわかる。さらに、このような“状況証拠”から積み重ねた見解ではあるが、諸葛亮は羌などの異民族と連携することを考慮し、永初年間をはじめとする後漢における羌の叛乱の経緯を念頭において北伐戦略を考えた可能性があるということも

指摘しておきたい[26]。

黄巾の乱以降の関中から河西回廊にかけての情勢を見ても、混乱が続いていた。まず184年冬から185年11月の北地郡・隴西郡・金城郡の湟中義従胡の北宮伯玉、先零羌、辺章と韓遂などの挙兵[27]があり、187年4月から189年2月にかけての王国を担いだ韓遂・馬騰の挙兵[28]につづき、関中・河西方面からの董卓の後漢朝廷での政権掌握とその死後の李傕・郭汜政権での混乱[29]が続いた。その後、司隷校尉・鍾繇や涼州牧・韋端の努力などで少し落ち着いていたが、211年の馬超・韓遂らと曹操の戦いでの曹操の勝利、213年に再起した馬超による冀城攻撃と失敗の後、214年の夏侯淵が河首平漢王・宋建を枹罕で破り、涼州を平定し、氐・羌に対する関中への徙民（強制移住）を実施[30]するなど支配を確立しようとするが、219年に武威の顔俊、張掖の和鸞、酒泉の黄華、西平の麹演ら[31]が、220年の曹操の没後に麹演が、張掖の張進と黄華・麹演に加えて三種の胡が、221年5月に鄭甘が、続けて涼州盧水の異民族健妓妾（伊健妓妾）・治元多らや酒泉の蘇衡、羌族の有力者鄰戴、丁令の蛮族、西平の麹光が反乱し、混乱を極めていたが、221年11月までに蘇則や張既に鎮圧され、徐々に西域との交通が始まってきた[32]とされる。ようやくこの地域が少し落ち着きかけてきたと思ったところで、227年に今度は西平の麹英が反乱を起こし、臨羌や西都（西平？）で暴れ[33]、225年から227年のことと思われるが、安定の羌族の大帥辟蹏が反乱を起こしている[34]。227年といえば、諸葛亮が漢中に駐屯し本格的に北伐準備に入った年でもあり、先述のように辟蹏は諸葛亮の最初の北伐が失敗した後に郭淮に敗れている。それに、敦煌には倉慈が赴任するまでの二十年間太守はおらず豪族が力を持っており、魏の統治が不安定であったことがわかる[35]。

ここまで述べてきた黄巾の乱以降の関中から河西回廊にかけての政治情勢の中でも注意しておきたいことがある。

まず、森本淳氏も指摘しているように、董卓政権（とその跡を継いだ李傕・郭汜政権）が涼州の州を挙げての反乱の延長戦上に位置づけられるとされている[36]が、傾聴に値すべき見解であろう。

次に、馬超が逃れていった漢中の張魯は先述のように板楯蛮を基盤としてお

り、このように見ると、馬超の動向の背景には羌・氐・蛮がおり、この頃の西北方面の異民族は馬超・韓遂らに従って行動していたことに注意が必要であり[37]、諸葛亮の北伐の頃には没していたとはいえ、馬超やその一族の馬岱が蜀漢の配下となっていたことにも留意すべきであろう[38]。

以上のように見ると、後漢末から曹魏初期の隴西・河西回廊はまだまだ安定しておらず、長安・洛陽から河西回廊への交通路を遮断すれば、河西回廊が蜀漢に帰属してくる可能性が高かったと考えられる。そうなれば河西回廊が蜀漢にとっての軍事的補給地となるだけでなく、西域への通路と西域貿易の利益は蜀漢のものとなったということが想定できる。これらのことから考えても、諸葛亮の採った戦略の「意図」が理解できるだろう[39]。

そのような情勢の中で、諸葛亮は「隆中対」でも示されていたように劉備没後に呉との友好・同盟関係を再構築し、西南夷をおさえ[40]、鮮卑の軻比能と連携を取り[41]、月支・康居などの周辺異民族とも連絡をとろうとしていた。

月氏・康居に関しては、後主傳裴注所引『諸葛亮集』に

> 諸葛亮集載禪三月下詔曰：「……呉王孫權同恤災患，潛軍合謀，掎角其後。涼州諸國王各遣月支、康居胡侯支富、康植等二十餘人詣受節度，大軍北出，便欲率將兵馬，奮戈先驅。（後略）」

とあるように、227年３月の劉禅の詔勅に「涼州の諸国王はそれぞれ月支・康居の胡侯支富・康植ら二十余人を派遣して節度を受けさせ、大軍が北へ出れば、兵馬を率い、戈をふるって先駆しようと望んでいる」とある。

森安孝夫氏はこの一文について、「河西回廊に割拠して半独立的立場にあった諸国の王たちが支配下にあった月支（月氏）・康居の人々をそれぞれの異民族リーダー（胡侯）たちに分統させて派遣しようとした」と考えており、月支（月氏）の軍団を「大月氏のバクトリア商人の軍団」、康居の軍団を「康国（サマルカンド）の（ソグド人の）軍団」、倉慈傳の記事[42]から胡侯を「河西地方に散在した西域商人集団のリーダーであると同時に、有事の際には十分な武装をした軍団の長ともなり得る人物であったに違いない」と推定しておられる[43]。

陳国燦氏は前秦の頃の『重修鄧太尉祠碑』にある「高涼西羌、盧水、白盧、

支胡、康居、□水」の「支胡」を土着の月氏胡とし、月支（月氏）の支富らを土着の月氏胡、康居の康植を粟特と考え、「涼州諸國王」は後漢末の動乱の中で王を称し、自立した胡人部落や集団の首領とし、三国時代の涼州のソグド人は少なからずいたと述べている[44]。それに対して、陳海涛氏もこの史料での「涼州諸國王」は河西に居住していた康居からの移民の首領であって康居王ではないとし[45]、馮培紅氏も月支（月氏）の支富を東遷して涼州にいた大月氏の酋長、康居の康植をソグドの康国出身と考え、中央アジアから流寓して涼州に至った胡人による部落が存在し、その首領が国王を称して武装していたとしている[46]。

筆者はこれまで、後主傳裴注所引『諸葛亮集』の記載に関連して、

> ここにある月支・康居に関しては特定できないが、大月氏や西域諸国の影響を受けているにしてもいないにしても「涼州や西域の異民族には蜀漢と良い関係を築くという選択肢があった」ということになる[47]。

と考えていたが、上記のような先行研究の見解を踏まえて、後主傳裴注所引『諸葛亮集』での月支（月氏）については、土着の月氏と東遷してきた月氏の双方ともに可能性があると思われるが、康居に関しては、敦煌[48]や近年甘粛省で発掘された高台県の地埂坡４号墓などの墓の壁画を見ると、鮮卑系だけではなく、ソグド系と思われるような人物画が存在するとされる[49]ことから考えても、現実に魏晋期の河西地域に康居（ソグド）人がまとまって居住していた[50]蓋然性があると現時点では考えている。

加えて、劉禅の詔勅にこのような記述があるということは、河西地域から使者が蜀漢に来ていなくてはならない。それだけ魏王朝の涼州に対する支配力が弱かったということを意味しているが、河西地域と蜀漢をつなぐ道としては、『華陽國志』巻三蜀志に

> 汶山郡……西接涼州酒泉，……。

とあり、「西は涼州酒泉と接する」と記されている[51]。直接接しているようには思えない汶山郡と酒泉を「接する」と表現していることからすれば、羌や氐を介して青海方面などを経由し、河西回廊へとつながっていった交流路を考えることができるが、この交流路は汶山郡から現在の甘粛・青海方面に抜ける「岷

江上流走廊」を含み、「川西民族走廊」と呼ばれるルートだと考えられる[52]。この動きがあったからこそ、229年12月に大月氏王波調（クシャーナ朝のヴァースデーヴァ）が「親魏大月氏王」とされた[53]という見方ができるだろう。

加えて、『史記』巻一一〇匈奴列傳に

而西置酒泉郡，以鬲絶胡與羌通之路。

とあり、『漢書』巻九十四上匈奴傳上に

而西置酒泉郡以隔絶胡與羌通之路。

とあることから、前漢武帝以来、「河西回廊で匈奴・鮮卑などの北方の草原の民と南の羌を分断する」戦略が採用されていたと考えられるが、諸葛亮による蜀漢と鮮卑や月支・康居などとの連携の目的の一つは、その戦略を逆手に取って「隴や河西回廊などで北方の草原の民と南の羌を結合」しようとしたことにあると思われる[54]。

これまでの先行研究において、後主傳裴注所引『諸葛亮集』での月支（月氏）・康居については、「北伐の現実に寄与するものではなかった」[55]と考えられることが多かった[56]。しかし、ここまで述べてきたように、諸葛亮の北伐の時期に、月支・康居からやってきた人々が実際に河西回廊の地域に居住し、武装もしていた可能性があることを考えると、蜀漢と結んだ月支（月氏）・康居の勢力の存在が（結果としても）関中や隴西での戦いに貢献することはなかったにせよ、諸葛亮の北伐戦略の中での洛陽・長安から隴（そして河西回廊）への道を遮断することに成功した後での涼州の攻略やその後の安定、そして戦略の展開に実際に寄与した可能性があることは指摘しておかなければならないだろう。

さらに、延光二年（123年）から敦煌太守・張璫が西域を経営していったことによって涼州が安定することを述べている[57]。これを踏まえれば、諸葛亮も涼州の獲得・安定のために西域との関係を重視していた可能性があり、そのためにも涼州にいた軍事力を有する月支（月氏）・康居の人々との関係を確立しておくことを重視したために出された劉禪の詔勅であった考えられる。

ここまで述べてきたように、諸葛亮は河西回廊の非漢族との連携を踏まえな

がら、隴への道、そして河西回廊という通商路でもあり、農業生産の豊かな地域を支配し、西域へのシルク・ロードを確保しようとしていた。さらに、諸葛亮は川西民族走廊とも関連し、さらに青海方面へ抜ける“天空のシルク・ロード”[58]、既に確保していた（現在のミャンマーや交趾などで海のシルク・ロードにもつながる）“西南シルク・ロード”[59] を蜀漢の領域内で結び、商業などでの利益によって蜀漢内部の負担[60] を軽減し、また経済的な相乗効果を大きくしようとしたと見ることができる[61]。

おわりに

諸葛亮の当初の北伐戦略は「隆中対」にあるように、荊州・益州をおさえて内政を整え、西方および南方の非漢族を手なずけ、呉の孫権と友好関係を結び、天下に「変」があれば、上将により荊州から、そして劉備自身により益州から同時に北伐を行うというものであったが、関羽の死と荊州失陥、そして劉備による荊州奪還の失敗と劉備自身の死を受けて、南中への遠征、孫権との友好関係の樹立、孟達による新城からと諸葛亮による益州からの北伐という「隆中対」を踏まえた政策を実行し続けたが、孟達が司馬懿に討伐された後は、陳羣傳附陳泰傳にあるように、一旦西北方面に出撃し、シルク・ロードへとつながる涼州（河西回廊）への交通路を遮断し、四郡（隴西・南安・天水・略陽）の人民・蛮族をあわせ、関・隴の要害を占拠して隴西（そして河西回廊）を攻略し、長安を窺うという「隆中対」に修正を加えた戦略を実行したのが、最初の北伐であった。

この戦略の基盤となったのは、非漢族が多かった河西回廊や隴西の不安定な政治情勢であり、諸葛亮の北伐戦略は107年からの羌の反乱の経緯を念頭において立案したものであった可能性がある。諸葛亮は戦略通りに隴西から河西回廊へ至る道を遮断し、「涼州諸國王」が派遣する月氏やソグド人と連携しながら、河西回廊からシルク・ロードも制圧して、西南シルク・ロードや“天空のシルク・ロード”をおさえ、蜀漢の領域によってこれらの商業路を結びながら、蜀漢内部の負担を軽減しようとしたと考えられる。

今後は街亭で敗れた後の蜀漢の北伐戦略をきっかけに、魏晋期の政治動向へ

の影響について、非漢族の動向と交通路に注意しながらさらに考察を加えていきたいと考えている。

注

1）「隆中対」及び諸葛亮や蜀漢の戦略に関しては数多くの論文があるが、ここでは史念海「論諸葛亮的攻守策略―中国古代地理政治家伝畧之七」〔以下、「史念海前掲論文」と略す〕（『文史雑誌』6－2　1948年　1頁～18頁、のち『河山集』一集　生活・讀書・新知三聯書店　1963年　280頁～301頁）、渡邉義浩「蜀漢政権の支配と益州人士」〔以下、「渡邉義浩前掲論文1」と略す〕（『史境』18　1989年　70～86頁，のち『三国政権の構造と「名士」』　汲古書院　2004年　第2章第2節・蜀漢政権の支配と益州社会　165頁～193頁所収）、田耕滋「諸葛亮伐魏不是「以攻為守」―兼論諸葛亮北伐的思想基礎」（『漢中師範学院学報』1997年1期　3頁～5頁）、付開鏡「《隆中対》実施中的秘密性与変異性」（『襄樊学院学報』31-7　2010年　9頁～14頁）、林榕烈「諸葛亮北伐目的新論―以多重戦略目的及其実現程度為中心」（『東方論壇』　2012年1期　114頁～120頁）、渡邉義浩「諸葛亮の外交政策」〔以下、「渡邉義浩前掲論文2」と略す〕（『東洋研究』190　2013年　123頁～149頁、のち『三國志よりみた邪馬臺國―国際関係と文化を中心として』（汲古書院 2016年）第4章105頁～129頁所収）を挙げておく。

2）武帝紀・先主傳・関羽傳などを参照。

3）文帝紀・先主傳・陸遜傳などを参照。

4）後主傳・諸葛亮傳及び同傳裴注所引『漢晉春秋』などを参照。

5）後主傳・諸葛亮傳・陸遜傳などを参照。

6）明帝紀及び同紀裴注所引『魏略』、『晉書』巻一宣帝紀などを参照。

7）関羽の死と荊州失陥、劉備による荊州奪還の失敗と劉備自身の死、南中への遠征、孫権との友好関係の樹立、諸葛亮による孟達の調略と司馬懿による孟達の急襲までの経緯については、渡邉義浩前掲論文1や拙著『三国志　正史と小説の狭間』〔以下、「拙著1」と略す〕（白帝社　2006年初版・2009年第2版、2017年電子書籍版〔パンダ・パブリッシング株式会社〕）なども参照。

8）この後、本論文では後漢末から三国時代の年代については便宜的に西暦で記すこととする。

9）陳羣傳附陳泰傳の一文を諸葛亮の実行した北伐戦略と指摘する書籍の初出は、管見の限り、拙著1であり（2006年版・2009年版　229頁～234頁、2017年電子書籍版145頁～146頁）、他の書籍・論文では指摘されていない。ここで、改めて論文として指摘させていただく。

10）228年の最初の北伐の経緯に関して、陳壽『三國志』での記載としては明帝紀・曹

真傳・張既傳裴注所引『魏略』・張郃傳・郭淮傳・後主傳・諸葛亮傳・趙雲傳・馬良傳附馬謖傳・王平傳など参照。さらに渡邉義浩前掲論文１や拙著１の2006年版・2009年版の235頁～242頁、2017年電子書籍版の149頁～153頁なども参照。

11）史念海「歴史時期黄河中游的森林」（『河山集』二集 生活・讀書・新知三聯書店 1982年　232頁～313頁）参照。

12）陳羣傳附陳泰傳の一文と諸葛亮の最初の北伐の関連性についても、管見の限り、拙著１の2006年版・2009年版の229頁～234頁と2017年版の145頁～146頁以外の先行研究の書籍・論文では指摘されていない。

13）馬謖が街亭で山に登るという判断をしたことについて、並木淳哉「曹魏の関隴領有と諸葛亮の第一次「北伐」」〔以下、「並木淳哉前掲論文」と略す〕（『駒沢史学』87 2016年　53頁～80頁）72頁では、『晋書』巻一宣帝紀・太和五年の条の

> 進次漢陽，與亮相遇，帝列陣以待之。使將牛金輕騎餌之，兵才接而亮退，追至祁山。亮屯鹵城，據南北二山，斷水爲重圍。帝攻拔其圍，亮宵遁，追擊破之，俘斬萬計。

とあるところから、

> 街亭の戦いから三年後、再び祁山から天水へと侵攻した諸葛亮だったが、司馬懿によって追い詰められ、鹵城の「南北二山」に拠って防ごうとしたものの、同じように包囲に遭って水を断たれ敗走したのだという。馬謖が街亭で取った判断それ自体は百パーセント悪手とは言えなかったのだろう。

と述べられているが、『晉書』巻一宣帝紀によれば、鹵城の「南北二山」に拠りつつ、近くの川の水の流れを断って重囲としたのは諸葛亮で、司馬懿がその重囲を攻め抜いたということではないかと思われる。

14）並木淳哉前掲論文68頁～73頁では、王平が街亭に派遣されたのは、曹操による漢中平定後に略陽へ移された板楯蛮（巴氐）を味方につけるためであったが、曹操に降った朴胡・杜濩・袁約らが劉備に攻撃された際、彼らを収容しつつ劉備側の巴西太守・張飛と戦ったのが張郃は略陽の巴氐や王平にとってかつての庇護者であったことから、馬謖は王平を疑い、張郃は王平に配慮して追撃を控えたと述べられている。非常に興味深い指摘であるが、張郃と巴氐や王平の関係がこの時に良かったとは限らず、馬謖が王平を疑ったことも推測の域を出ないのではないかと思われるため、現時点ではこの見解について筆者は否定的である。

15）月支城に関する記載は曹真傳本文。「月支」城という名前から、この城はおそらくは月氏の人々に関係する城であろう。本文でも指摘するように、森安孝夫『興亡の世界史　シルクロードと唐帝国』（以下、「森安孝夫前掲書」と略す）（講談社 2007年、のち講談社学術文庫　2016年）第二章・「ソグド人の登場」・東方への進出・商人と武人の両面性によれば、涼州の月支は「（東遷してきた）バクトリア商人」と考えられている（2007年版　113頁～117頁、2016年版　120頁～123頁）が、この時代の隴西にまでバクトリア商人が入ってきていたとは考えにくく、現時点で

はこの「月支」はおそらく小月氏のことだと思われる。

16）後漢期の河西・隴西については、前田正名「後漢書に現われた一世紀前半期の河西」（『立正史学』31　1967年 42頁～56頁）・「１世紀後半・２世紀の河西」（『アジア諸民族における社会と文化―岡本敬二先生退官記念論集―』 国書刊行会 1984年　41頁～70頁）、狩野直禎「後漢成立期の隴西」（『史窓』49　1992年　１頁～28頁）、鵜飼昌男「建武初期の河西地域の政治動向―『後漢書』竇融傳補遺―」（『古代文化』48-12　1996年 20頁～33頁、59頁～60頁）、高村武幸「河西における漢と匈奴の攻防―前漢後半期から後漢初期の史料分析を通じて」（『東洋学報』82-３　2000年 339頁～369頁）、關尾史郎「漢魏交替期の河西」（『中国世界における地域社会と地域文化に関する研究』２　2003年　１頁～14頁）などを参照。また、榎一雄（編）『講座　敦煌』第２巻（大東出版社　1980年）の榎一雄「Ⅰ　漢魏時代の敦煌」（同書１頁～37頁）も併せて参照。

17）例えば、『漢書』巻二十八下・地理志・隴西郡に羌や氐が居住していたと考えられる氐道・羌道が存在する。

18）山田勝芳「後漢・三国時代貨幣史研究―古代から中世への展開」（『東北アジア研究』３　1999年　59頁～84頁）・『貨幣の中国古代史』（朝日新聞社　2000年）第六章の「後漢の銭封印―悪銭が主役へ―」（187頁～222頁）や第八章の「「開元通宝」銭時代へ」（249頁～286頁）、佐原康夫『漢代都市機構の研究』（汲古書院　2002年）第四部「貨幣経済」・第二章「漢代貨幣史再考」（493頁～521頁）・第三章「漢代の貨幣経済と社会」（522頁～557頁）、柿沼陽平『中国古代の貨幣　お金をめぐる人びとと暮らし』（吉川弘文館　2015年）など参照。

19）榎一雄(編)『講座 敦煌』第２巻の榎一雄「Ⅰ 漢魏時代の敦煌」27頁参照。また、この涼州の豊かさは史念海前掲論文でも指摘されている。

20）この反乱については、内田吟風「後漢永初の羌乱について」〔以下、「内田吟風前掲論文」と略す〕（『東洋史苑』24・25　1985年　45頁～66頁）、渡邉義浩「後漢の羌・鮮卑政策と董卓」〔以下、「渡邉義浩前掲論文３」と略す〕（『三國志研究』10　2015年　１頁～15頁、のち『三國志よりみた邪馬臺國―国際関係と文化を中心として』（汲古書院　2016年）第二章の「後漢の羌・鮮卑政策と董卓」 57頁～83頁所収）などを参照。

21）後漢の涼州放棄論については、内田吟風前掲論文や渡邉義浩前掲論文３などを参照。

22）『後漢書』（以下、巻數は省略する）安帝紀には

永初元年……先零種羌叛，斷隴道，大爲寇掠，遣車騎將軍鄧騭、征西校尉任尚討之。丁卯，赦除諸羌相連結謀叛逆者罪。

とあり、同西羌傳にも

安帝永初元年夏，遣騎都尉王弘發金城、隴西、漢陽羌數百千騎征西域，弘迫促發遣，羣羌懼遠屯不還，行到酒泉，多有散叛。諸郡各發兵徼遮，或覆其廬落。於是勒姐、當煎大豪東岸等愈驚，遂同時奔潰。麻奴兄弟因此遂與種人俱西出塞。先零

別種湞零與鍾羌諸種大爲寇掠，斷隴道。

とある。

23）『後漢書』安帝紀には

永初……二年……十一月辛酉，拜鄧騭爲大將軍，徵還京師，留任尚屯隴右。先零羌湞零稱天子於北地，遂寇三輔，東犯趙、魏，南入益州，殺漢中太守董炳。

とあり、同西羌傳にも

於是湞零等自稱「天子」於北地，招集武都、參狼、上郡、西河諸雜種，衆遂大盛，東犯趙、魏，南入益州，殺漢中太守董炳，遂寇鈔三輔，斷隴道。

とある。

24）『後漢書』安帝紀には

永初……四年……三月，南單于降。先零羌寇褒中，漢中太守鄭勤戰歿。

とあり、同西羌傳にも

明年春，湞零遣人寇褒中，燔燒郵亭，大掠百姓。於是漢中太守鄭勤移屯褒中。軍營久出無功，有廢農桑，乃詔任尚將吏兵還屯長安，罷遣南陽、潁川、汝南吏士，置京兆虎牙都尉於長安，扶風都尉於雍，如西京三輔都尉故事。時羌復攻褒中，鄭勤欲擊之。主簿段崇諫，以爲虜乘勝，鋒不可當，宜堅守待之。勤不從，出戰，大敗，死者三千餘人，段崇及門下史王宗、原展以身扞刃，與勤俱死。

とある。

25）『後漢書』安帝紀には

乙丑，初置長安、雍二營都尉官。

とあり、注に附された『漢官儀』には

漢官儀曰：「京兆虎牙、扶風都尉以涼州近羌，數犯三輔，將兵衞護園陵。扶風都尉居雍縣。故俗人稱雍營焉。」

とある。また、本論文注24所引『後漢書』西羌傳も参照。

26）このような諸葛亮の北伐戦略と後漢永初期の羌の反乱との類似性についても、管見の限り、拙著１・2017年版147頁～148頁以外の先行研究の書籍・論文では指摘されておらず、ここで論文としても指摘させていただく。

27）武帝紀・陶謙傳・馬超傳・孫破虜（孫堅）傳、『後漢書』霊帝紀・應劭傳・劉陶傳・皇甫嵩傳・董卓列傳・西羌傳など参照。

28）賈詡傳、『後漢書』靈帝紀・傅燮傳・蓋勳傳注『續漢書』・皇甫嵩傳・董卓列傳など参照。

29）この時期に馬騰と劉焉が李傕・郭汜らの政権を倒そうとしていたことについては、森本淳「後漢末の涼州の動向」（以下、「森本淳前掲論文」と略す）（『中央大学アジア史研究』32　2008年　111頁～132頁、のち森本淳『三国軍制と長沙呉簡』（汲古書院 2012年）第２部第１章　149頁～173頁所収）や拙稿「劉焉政権について―後漢末期の益州と関中・河西回廊」（『創価大学人文論集』第29号　2017年３月　61頁～74頁）、拙著１・2017年電子書籍版の70頁～74頁など参照。

30）武帝紀・夏侯淵傳・張郃傳など参照。
31）武帝紀・張既傳など参照。
32）220年以降の反乱については、文帝紀・同裴注所引『魏書』・張既傳・蘇則傳など参照。蘇則傳によると、蘇則が223年に亡くなるので、それ以前のことだろう。後漢末から曹魏初期にかけての隴西・河西回廊については、拙著１の2006年版・2009年版の231頁～232頁や2017年電子書籍版の146頁～147頁、並木淳哉前掲論文なども参照。
33）明帝紀参照。
34）郭淮傳参照。
35）倉慈傳参照。
36）森本淳前掲論文参照。
37）武帝紀・馬超傳・同傳裴注所引『魏略』など参照。
38）馬超と蜀漢政権については、王北固「涼州兵団在三国史上的特殊地位―従馬超助劉備取蜀説起」（『開封大学学報』2000年３期　17頁～23頁）、張東「馬超与蜀漢政権」（『襄樊学院学報』2008年６期　78頁～81頁）、渡邉義浩前掲論文２など参照。
39）拙著１の2006年版・2009年版の231頁～232頁や2017年電子書籍版の146頁～147頁でも指摘している。
40）基本的な史料としては、諸葛亮傳・李恢傳・呂凱傳・馬忠傳・張嶷傳、『華陽国志』巻四南中志などを参照。先行研究は数多く存在するが、西南夷に関する最近の研究として、大澤勝茂「秦・漢より三国に至る西南夷の世界―漢人豪族社会の発展と少数民族支配―」（『アジア文化研究』８－８　2001年　143頁～160頁）、柿沼陽平「三国時代西南夷の社会と恩信」（『帝京史学』30　2015年　101頁～129頁）・「三国時代西南夷の社会と生活」（早稲田大学長江流域文化研究所〔編〕『中国古代史論集政治・民族・術数』2016年　143頁～168頁所収）などが挙げられる。
41）諸葛亮傳裴注所引『漢晉春秋』参照。
42）また、倉慈傳には

　及西域諸胡聞慈死，悉共會聚於戊己校尉及長吏治下發哀，或有以刀畫面，以明血誠，又爲立祠，遙共祠之。

とあり、森安孝夫前掲書2007年版の115頁～117頁、2016年版　121頁～122頁）では波線部の習俗がオアシス諸国ではソグド諸国とクチャで知られるのみとだとしている。
43）ここまでの森安氏の見解については、森安孝夫前掲書2007年版の113頁～117頁、2016年版の120頁～123頁参照。
44）陳国燦「魏晋至隋唐河西人的聚居与火祆教」（『西北民族研究』1988年第１期　193頁～209頁、282頁）参照。
45）陳海涛「漢唐之際粟特地区諸国与中原王朝的関係」（『敦煌学輯刊』1999年第１期　115頁～122頁）参照。

46）馮培紅「絲綢之路隴右段的粟特人踪迹鈎沈」（『浙江大学学報 人文社会科学版』46-５　2016年　54頁～70頁）参照。
47）拙著１の2006年版・2009年版の234頁、2017年電子書籍版の149頁参照。
48）郭萍「粟特民族対魏晋至唐初敦煌美術的影響」（『貴州民族研究』2010年第６期132頁～136頁）など。
49）蘇哲『魏晋南北朝壁画墓の世界　絵に描かれた群雄割拠と民族移動の時代』（白帝社　白帝社アジア史選書008　2007年）、甘粛省文物考古研究所・高台県博物館「甘粛高台地**堙**坡晋墓発掘簡報」（『文物』2008年第９期　29頁～39頁）、呉萊・王策・毛瑞林「河西墓葬中的**鮮**卑因素」（『考古与文物』 2012年第４期　75頁～82頁）など参照。高台県の墓葬壁画とソグドとの関連については、鄭怡楠「河西高台県墓葬壁娯楽図研究―河西高台県地**堙**坡Ｍ４墓葬壁画研究之二」（『敦煌学輯刊』2010年第２期　117頁～134頁）・「河西高台墓葬壁画娯楽図与亀茲楽舞蘇摩遮――兼論隊舞的起源及其高台墓葬壁画楽舞図的性質」（『敦煌学輯刊』2012年第４期　130頁～143頁）・「河西高台墓葬中粟特人図像与酒泉胡人聚落―以河西高台地**堙**坡Ｍ４墓葬壁画為中心」（『高台魏晋墓与河西歴史文化研究』 甘粛人民出版社　2012年　489頁～500頁）など参照。
50）三崎良章「３～５世紀の河西墳墓画像に見られる「塢」について」（『史滴』38 2016年　218頁～199頁）など参照。
51）拙著１の2006年版・2009年版の293頁、2017年電子書籍版の111頁や177頁参照。
52）石碩〔著〕・本間寛之〔訳〕「四川と民族走廊」（『アジア遊学』５　勉誠出版　1999年　15頁～20頁）、石碩「川西民族走廊的歴史変遷与特点」（『天府新論』 2000年Ｓ１期　90頁～93頁）・「漢晋時期藏彝走廊中的「氐」」（『康定民族師範高等専科学校学報』18-３　2009年　１頁～５頁）・「藏彝走廊歴史上的民族流動」（『民族研究』2014年第１期　78頁～90頁）、拙稿「劉璋政権について―漢魏交替期の益州と関中・河西回廊」（『東洋哲学研究所紀要』32　2016年　107頁～127頁）、拙著１・2017年電子書籍版の111頁など参照。加えて、王子今「河西“之蜀”草原通道：絲路別支考」〔以下、「王子今前掲論文」と略す〕（陝西師範大学歴史文化学院・陝西歴史博物館〔編〕『絲綢之路研究輯刊』第一輯　2017年　商務印書館出版　16頁～28頁）では、厳耕望『唐代交通図考』でも指摘されているように西北河湟青海地区が長江流域につながる「要道」であることや『漢書』巻二十八上地理志や『續漢書』郡國志、『史記』巻二夏本紀などを見ると蜀郡・西海（現在の青海）・張掖に「鮮水」という地名があり、これが羌族の移動と密接な関係があると考えられること、居延漢簡「蜀校士」という記述があること、成都から出土した漢代の画像磚に胡人や駱駝が描かれていること、『史記』巻一一〇匈奴列傳や『漢書』巻九十四上匈奴傳上などからも河西四都の設置の目的の一つが河西回廊の南にいた「南羌」と他の草原民族との関係を絶つことにあり、『後漢書』西域傳での延光二年以降の敦煌太守・張璫による西域経営の安定の際にも北の匈奴と南の羌が結ばないように配慮している

ことが指摘されていて、非常に興味深い。

53）明帝紀には

太和……三年……癸卯，大月氏王波調遣使奉獻，以調爲親魏大月氏王。

とあり、渡邉義浩「『三国志』東夷傳倭人の条に現れた世界観と国際関係」（『三国志研究』６　2011年　33頁～48頁、のち『三國志よりみた邪馬臺國―国際関係と文化を中心として』（汲古書院　2016年）第六章「国際関係よりみた倭人傳」 151頁～172頁・第七章「三國時代の文化と倭人傳の世界観」 175頁～200頁所収）でも指摘されている。

54）王子今前掲論文参照。

55）渡邉義浩前掲論文２参照。

56）例えば、渡邉義浩前掲論文２の他にも、宮川尚志『諸葛孔明』（以下、「宮川尚志前掲書」と略す）（冨山房　1940年、桃源社　1966年、光風社出版　1984年、講談社講談社学術文庫　2011年）では「対外宣伝にすぎないだろう」と述べている（冨山房版ではこの指摘はなく、桃源社版・光風社出版版166頁、講談社学術文庫版174頁には記載されている）。拙著１の2006年版・2009年版の234頁、2017年電子書籍版149頁でも、蜀漢と涼州の異民族が良好な関係を築く選択肢があったことは指摘しているが、実際の軍事力としての可能性については指摘していない。

57）『後漢書』西域傳参照。

58）青海方面の商業ルートや“天空のシルク・ロード”については、松田寿男『松田寿男著作集』四 東西文化の交流（六興出版　1987年）の「青海史論」（同書135頁～152頁、初出は『東洋学術研究』３－２　1964年　59頁～75頁）、シルクロード学研究センター〔編〕『中国・青海省におけるシルクロードの研究』（シルクロード学研究センター　2002年）、前園実知雄「中国・青海省におけるシルクロードの調査」（一）・（二）（『奈良芸術短期大学研究紀要』2003年度版　51頁～70頁・2004年度版　30頁～57頁）、さらに拙著１の2006年版・2009年版の223頁～224頁、2017年電子書籍版の154頁～155頁などを参照。ちなみに、魏延傳・楊戲傳附『季漢輔臣賛』によると、230年、諸葛亮は魏延と呉懿を羌中（南安の界）に侵入させているが、拙著１の2006年版・2009年版の244頁～245頁、2017年電子書籍版の142頁において、この地域が河西回廊だけでなく、青海方面の“天空のシルク・ロード”への入り口にもなる地域であり、注意が必要だと述べている。

59）宮川尚志前掲書、藍勇『南方絲綢之路』（重慶大学出版社　1992年）、鄭廷良『絲路文化』西南巻（浙江人民出版社　1995年）など多数の研究がある。

60）諸葛亮傳には

三年春，亮率衆南征，軍資所出，國以富饒，乃治戎講武，以俟大擧。

とあり、呂乂傳には

丞相諸葛亮連年出軍，調發諸郡，多不相救，乂募取兵五千人詣亮，慰喻檢制，無逃竄者。

とあることから、蜀漢や南中でも負担が大きかったことがわかる。

61）拙著１の2006年版・2009年版の233頁、2017年電子書籍版の148頁～149頁参照。